
魔法少女リリカルなのは The World Of Desire

myself

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは The World Of Desire

【Nコード】

N2603V

【作者名】

myself

【あらすじ】

神様（女神）のちょっとしたミスで死んでしまった主人公如月陶治。

しかし、彼女は彼を好きな世界に転生させるといふ。

そこで彼は「魔法少女リリカルなのは」の世界を選ぶと同時に『チート』といわざるを得ない能力を手に入れてしまった。

これから彼はどのように物語を変革させていくのか・・・

魔法少女リリカルなのはThe World Of Desire ,

少年の持つ未来を切り開く力を持って・・・いま、始まります。

第0話 次元をかける少年・・・？（前書き）

初めまして^^

一念発起とはこのことですね！

昨日「よし、なのはの二次創作をかこう！」と思って・・・ついにやりました！！

駄文かもしれませんが、これからうちも成長していくつもりなので、ぜひご鞭撻の程お願いしますね^^

なお、いくら駄文だといって誹謗中傷などは絶対にやめてくださいね^^；

うちが傷つきます；；（泣）

でも、ご感想・御意見はいつでも受け付けていますので、ぜひぜひ送ってくださいね^^b

これから成長していくうちと、物語の中で成長していくキャラクターたちともども、皆さんの温かい目で見守ってください^^♪

第0話 次元をかける少年・・・？

「・・・・・・・・え？」

目覚めたとき、僕は何もない、ただ果てしなく続く真っ白な空間の中に立っていた。

「・・・・・・・・なにこれ・・・・・・・・僕は確かコンビニに向かう途中だったはず・・・・・・・・」

僕はコンビニに向かう途中、上から何か押しつぶされるような圧迫感を感じていきなり目の前が暗くなった。そして、気がついたら・・・・・・・・今に至る。

「・・・・・・・・ここはどこだろう？」

「ここは次元の狭間よ」

急に空間内を響き渡るやさしい声。

「あなたは事故によって死んだの」

「・・・・・・・・事故？」

「そう・・・・・・・・事故」

だんたんと近づいてくるその声が後ろか聞こえることに気づき、ふと振り返ると

「ごめんなさいね？私のミスなの・・・・・・・・」

そこには亜麻色の長髪をもち、いかにも古代ギリシャ時代の服装を

着ている美しい女性が立っていた。

「あなたは？……」

「私は死をつかさどる女神……そうね、アリアとでも呼んでもらいましょうか」

「そう、、、、僕は如月陶冶きづきとうぎ。よろしく。」

「ええ。よろしくね陶冶。」

「それで……僕はあなたのミスで死んだの？……ひどいもんだね」

「まあそついわないで？私だって間違えることはあるもの」

あまり悪びれる様子を見せない彼女にすこし腹が立ったが、日頃ストレスを我慢していた僕にとってそれはある程度我慢できるものだった。しかし、僕は彼女の次の言葉にびっくりした。

「それでね、さっき大神と話したんだけど、あなたをあなた自身が好きな世界へと転生させることにしたの。もちろん、何個か願いをかなえてね」

「え？……マジ？」

「ええ……マジよ？」

驚いた……。これは人生の転機？ではないだろうか……。(もつとも、もう死んでるが)

「やった！うそじゃないよね！？」

「だからうそじゃないって言うてるでしょうに……(呆れ)」

何でも願いがかなうか……。ならば、ここは一つしかないね！

「リリカルなのはの世界に転生して！」

「はいはい……。っと設定おk。それで、願い事は？」

「そだね……。」

ここはやっぱ願い事は無限に……

「あ、ちなみに世界の覇者とか、願い事は無限にかなうとかは無しね」

「……僕の思考読んだ？」

それは駄目なんだ……なら、

「じゃあ、身体能力無限・魔導師ランクSSS以上・特殊技能及びレアスキル各種無限・武器精製能力・魔法体系はミッドチルダ・古代ベルカ式で」

「……チート？」

「うん、チート」

「……こんなにずうずうしい転生者は初めてよ……」

なぜか彼女の背中からは影が……何も言うまい。(おいw)

「はあ……一応できたわよ」

「よし、じゃ『ちよつと待ちなさい』……なに？」

「一つ言っておくけど、なのは無印でいいよね？」

「もち。どうせなら最初からやりたいしね」

「それで、名前はどつするの？今の名前は使えないわよ？」

なに？同じ名前は使えないのか……

「なら、これから僕はアイル・ステルヴァーグと名乗ることにするよ」

「わかった……これで……良しつと。……ああ！言い忘れてたけど、あなたはその世界で0歳の赤ん坊に転生するわよ」

「はいはい………って、え？」

その言葉をきいたとき、僕はすでに転送装置の中に入っていた。

「そんなの聞いてない………!!?!?」

「だって言わなかったものw(笑)」

「そんな大切なこと先に言えよ………!!?!」

そして………

「おぎゃ………!!?!」

僕はなのはの世界でアイル・ステルヴァーグとして第二の人生を歩むことになった。

転生したのはいいけどこれからどうしようかな………

第0話 次元をかける少年・・・？（後書き）

・・・どうでした？やっぱり駄文でした？（泣）

といってもまだまだこれから！いろいろ改善してどんどん書いていきますよ～^^

なお、受験生ということもあり週一投稿を最低目標としていますのであしからずw

これからも、うちと主人公ことアイルを見守ってくださいね^^b

本編の前に・・・（前書き）

ここでは、無印編の登場人物について説明を行います^^
さすがに説明無しではつらいですもんねw
では、張り切って？いきましょ^^

本編の前に……

主人公 アイル・ステルヴァーグ（本名：如月陶冶）

身長 123cm 体重 20kg 目の色 藍色

魔導師ランク SSS以上（いわゆるEX）

レアスキルのレベル EX

身体能力（筋力・持久力・視力などもろもろ） EX

魔法形態 ミッドチルダ・古代ベルカ式

攻撃タイプ 近・中・遠を両方こなすが、どっちかって言うと遠距離型（なのは系W）

魔法変換資質 焰 氷 雷 （得意なもの）

レアスキル一覧

・イミテーション

一度見た技をコピーする。しかし、再び使うにはデバイス登録が必要。

アンリミテッド・クリエイション

・無限生成

無限かつ何でも生成可能。デバイス・ユニゾンデバイス・魔導書・etc

デバイス 今は秘密W

主人公はこのようにして設定しています^^・・・・・・・・マサシ
クチートデスネw

これから、本格的に介入しますので楽しみにしてくださいね^^

あ、あと募集なんです^^;

こんなストーリーを見たい！なんていう意見もお寄せいただいても
結構ですのでどんどん送ってくださいね^^・・・・・・・・うち
がきちんと再現できるか不安たつぷりなんですww

では、次回「第一話 出会い」・・・・・・・・リリカル マジカル 介入
です♪ (え？www)

第1話 出会い（前書き）

一つ追加報告w

前回の設定の説明は、今回の話からの設定になります。
すこし混乱した方もいたと思います^^；
すいませんでしたw

では、本編をどうぞ♪

第1話 出会い

「……………転生してからはや4年、僕はついに行動を起こそうと
いまデバイスの作成に勤しんでいる。
が、ある問題に直面していた

「デバイスってどうつくればいいのかな……………」

そう。デバイスを作ろうとしたのはいいが、作り方がまったくわ
からないw……………僕ってもしかして失敗した？

「……………あ、無限生成があるから大丈夫かも！試しにこれと
これを……………」
アンリミテッド・クリエーション

前もってアリアに頼んでおいた材料を適当に組み合わせ、僕のレア
スキルを発動させると……………

「なんか勝手にできたっぽい？……………できる（笑）。でもこ
の形はあんま好きじゃないんだよね」

「応それらしいものができたんだけどね……………宝玉っぽいの。
（レイジングハート系みたいだな）」

「ん……………やっぱり指輪にしよう。えと……………ここを、こう組み
合わせて……………ここを切り落とせば（！？）……………よし
！できた〜！」

出来上がった姿は、まさしく某家庭教師ヒットマンアニメの指輪。
・

・これ、著作権大丈夫よね？

「ま、この世界にそういうアニメ無いからいいかな？・・・さて、早速認証しましょうか」

そうやって僕はデバイスを起動した。

『Good morning and nice to meet you my mister』

「おはよう。早速だけど、認証してもらってもいいかな？」

『Of course my mister・・・please tell me your name』

「僕の名はアイル・ステルヴァーグ」

『Ok. And please set the detail program』

「了解。僕の魔法形態はミッド・古代ベル力式で遠距離特化。一応オールラウンダーだけどね。君もそれが出来るように調整してあるから確認してみてね」

『Alright my master』

「それと、君の名前はStern Himmel（シュテルン・ヒンメル：星空）だよ。これからよろしくね！シュテル！」

『Of course my master・・・My master, can I change the language to Japanese?』

「そうしてくれた方が僕としても助かるよ」

『Ok・・・これでいいですか?』

「うん！上出来だよ、シュテル。・・・早速だけど、すこし僕の魔力を制御して欲しいんだけど、いいかな？」

『かまいませんよ?・・・それにしても、マスターはチートですね』

「まあ……それは言わないでくれたらうれしいな（苦笑）」
『了解です。ではひとまずAランクまで下げますか？』

「うんちようどいいね、それでおねがい！」

『……完了しました！』

「うん！お疲れ様。すこし休んでいいよ」

『了解ですマスター』

これで大体の準備はできたね……あとはすこし魔法の練習したいけど、流石に4歳のからではすこし無理があるよねw

「魔法の練習は……5歳からいいかな？うん、それでいい！」

作：……一般の人から見て、どう思います？（笑）

「そこ、すこしうるさいよ！」

作：……あ……、すみません（汗）

「さてと……公園にでも歩いて行って体力を『アイル……！？』……お母さんが呼んでる……」

僕を呼んでいるのは母親であるハイナ・ステルヴァーグ。一般のOである。

「もう！どこいったの？探しても見当たらないんだから！」

「こめんお母さん。ちよつと押入れの中で探し物してた！」

「何探してたの？」

「んとこの前ね？お父さんがここに変な本を入れてたからそれ『あなた！ちよつときなさいな……！？』……あ……ごめんお父さん

（苦笑）「

よし！今のうちに戦略的撤退を！！・・・お父さん、貴方の犠牲は決して無駄には・・・「ギャアアアアア！！！！・・・」・・・聞こえなかったことにしよう・・・そうしよう。

「っさてと、すこしお昼寝しよう。眠たい・・・ふあゝ・・・

」

布団に入ってしばらくすると、

「zzzzzzzz」

あっという間に僕は夢の旅へと旅立っていった。

時間はあっという間に過ぎてゆき、僕は6歳。身長も伸びたよ？・・・普通くらいには。

デバイスを作ったあの日から、ゆっくりとではあるけれどトレーニングをしてすごしてたよ。えッ、何をしてたかって？それはね、毎

日2キロ歩いたり、ダンベル2キロ持ち上げたり、プロテイン飲んだり、異世界に行って魔法の練習していたり、まあいろいろと。

何、6歳児じゃないって？当たり前じゃん。僕は転生者だよ？中身は大人だってw

まあ、それはともかく！すこし近況報告。そろそろ登場人物たちに接触するために僕は海鳴市に行かないと行けないんだけど、両親が元気だと（おいw）行動が制限されちゃうよね・・・そこで、僕は二人に魔法で催眠術をかけて僕一人で暮らせるようにしてもらったんだ！

・・・・文句、言わせないよ？

それで、いま登場人物の一人である高町なのはの両親が営んでいる喫茶翠屋のすぐ近くのマンションで一人暮らししてるんだ！お金もマンションもアリアが準備してくれたし無問題だね！

それでいま、その高町なのはと接触するために引越し報告という名目で近所を訪問しているんだよ。

・・・・すこし気温が熱くて一刻も早く帰りたいんだけど（苦笑）

そして、ついに翠屋の目の前に来ました！

「ここが翠屋かあ・・・いざ目の前にするとすこし緊張するw・・・よし！いざ行きますか！」

カランカラン・・・

僕がドアを開けると、

「いらつしゃ・・・ん？僕どうしたの？一人？」

そこには美人な人が・・・なのは母の桃子さんが立っていた。
・・・リアルで若すぎるw

「はい！近くに引つ越してきたのでその後挨拶にと！」

と、僕はさっきから使ってる言葉を用いて挨拶をした。

「近くに引つ越してきたアイル・ステルヴァーグです！これからよろしくね、お姉さん！」

「あらやだwお姉さんだなんてww」

僕の言葉に照れる桃子さん・・・かわいい／／／

・・・でも僕に熟女好きというスキルはないんだよね（汗）

ピキュイン！（某ガンダムのコーディネータの技能発動の効果音w）

「・・・アイル君、今失礼なこと考えてなかった？」

「い、いいえ！そんなことないですよ！」

・・・僕の心読んだ？ンな分けないよね（汗）

「ちなみにアイル君は何歳？」

「僕は今年で6歳になりました！」

「ヘッ！？・・・ホントに6歳？」

「はい！そうですよ（ニコッ）」

「ツツ／／／／／」

ん？なんで赤くなるんだろ・・・熱でもあるのかな・・・

「じつじゃあ、うちのなのはと同年ね！」

「なのは……？」

「そうよ。私たちの娘の高町なのは。」

「へえ……そうなんですか！」

「けど、さつきから探してるんだけどどこにもいないのよね……」

「……お、これはチャンスだね？ですよね？いや、絶対そうだ！」

「あの、もしよかったらいつしよにさがしましょうか？」

「えッ？いいの？」

「はい！僕、なのはちゃんとお友達になりたいですから！」

僕の言葉に桃子さんはすこし考えるような素振りを見せて……

「じゃあ、お願いしようかな？」

「はい！任せてください！ちなみに、外見などの特徴を教えてくださいませんか？」

「えっとね、髪は栗色でツインテールで大体近くの公園にいますから」

「わかりました！じゃ、公園に行つて見ますね」

「はい！お願いね～！」

……

「アイル君ってほんとに6歳なのかしら……」

桃子さんと別れた後、僕は公園にたどり着いた。そこにはもう人影はなく、ただ一人の少女がさびしそうにブランコに乗ってうつむいていた。

「……多分あの子だね」

そう思っ僕はその女の子に声をかけた。

「こんにちわ！」

ビクッ！！

そう震えてゆっくり僕のほうを振り返った。

「こんにちは。君は……だれ？」

「僕はアイル！君、なのはちゃんだよね！？」

「うん、そだよ。でもなんで私の名前を知ってるの？」

「君のお母さん、桃子さんから探して欲しいってお願いされたからだよ」

「そう……なんだ……」

なんだかなのはの喋り方に違和感を覚えた僕は、すこし尋ねてみた。

「そうしてなのはちゃんはそんなに悲しそうなの？」

「えッ？」

「だって、泣きそうな顔になってるよ？」

「・・・・・・・・・・」

「よかつたら僕、話きくよ?」

・・・・・・・・・・
長い沈黙の後、なのはがようやく口を開いた。
・・・・・・・・・・

「あのね、お父さんがとっても凄い怪我をしちゃったんだ・・・・その日からお父さんがいないからお店でお母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんが一生懸命に働いたりお手伝いしてるけど、まだ小さい私には何もできないんだ・・・・・・・・」

「そう・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・」

「それで・・・・・・・・私思っちゃったんだ。・・・・・・・・私って邪魔なのかなって」

「ッ・・・・・・・・」

「だから、私はここに・・・・『そんなわけあるわけない!!』・・・・え?」

僕はつい大声で叫んでしまった。しかし、思ったことを口にすることは止まらなかった・・・・

「そんなことあるわけじゃないか!君が邪魔な存在ならなんで君のお母さんはなのはちゃんを探そうとするの?なんで心配してくれるの?・・・・それは君が桃子さんや君のお兄さん、お姉さんにとって大切な存在なんだ!お父さんがいないのなら、君ががんばってお母さんたちを応援したり支えたりできるように努力するべきじ

やないの？むしろ君がいないと桃子さんたちは悲しむよ……」

「ホントに……ッ……そう……なのかな……」

「絶対そうに決まってる！僕が保障するよ」

「ツク……グス……」

「だから、すこしたら一緒に帰ろ？」

「うん……グスッ……うん!!」

なんとかなのはのことを慰めることできた……かな？

それからしばらくしてなのはが落ち着いたので一緒に帰ろうとブランクから立ち上がると、

ギユ……

「??」

何かと思ってふと右手を見ると、なのはの手があった。

「あの……ね？手をつないでもいいかな？」

あ、、いや……そんな上目遣いで見られたら……

「うん／／／いい……よ？」

「ありがと……にやはは！」

断れないじゃないの／／／／／やっぱ、なのははかわいいよねw

「さあ、アイル君！帰ろ！」

「うん!!」

こうして僕たちは仲良く手をつないで一路、翠屋へと向かったのであった……………

その帰り道、

「アイル君、私のことなのはってよんでね！」

「うん！なのは！（ニコッ）」

「ッ／＼／＼／＼うん！」

……………なんで赤くなるんだろ……………桃子さんもそうだったし……………僕、なんかやつちやった？

そのとき、

『はあ……………マスターは真性の鈍感なのかもしれませんね』

と、シュテルが誰にも聞えない声でつぶやいていたとかいないとか……………

第1話 出会い（後書き）

さて、一日でこんなにはかどりました！

流石うち！ぜんぜん上手くない・・・（泣）

想像が膨らむのはいいんですが、なかなか文章にするというのは難しいですね^^；他の作者さんが凄いと感じましたw

さて、次はついになのはの魔力が覚醒します！そしてついにアイルの介入が！・・・いつごろ清祥付属に転入させましょうかw

さて！次回は「第2話 本格介入」！

リリカル・マジカル・介入します♪

第2話 本格介入（前書き）

さて、ようやく主人公がなのはと出会いました。

今回はなのはの悩みを解決するべく行動を起こします！

そしてついに主人公も……！！？

ってなわけで、本編へ行って見ましょう♪

第2話 本格介入

なのはと公園で合流した後に、僕となのはは翠屋へと到着した。店内に入ってみるとすでに店が閉店しており人っ子一人いなかった。
・
・
・不気味だ・
・
・

「桃子さ〜ん！帰ってきましたよ〜〜！」

「おかあさ〜ん！ただいま〜！！！」

・
・
・
・
・シ〜〜〜ン・
・
・

いくら声をかけても店の奥からも反応がなかった。

「桃子さん、どこかに出かけたのかな？」

「わたしはどこかにいくよていがあるってきいてないけどなあ〜
・
・」

僕となのはがなぜ誰もいないのかと話していると、突然・
・
・

「な〜のは〜！！！！」

「いッ！？・
・
・うにゃあああああ〜！！！！？」

後ろから桃子さんが現れなのはの頭をぐりぐりと！（クレヨン。んちゃん風にw）

しかし、しばらくすると桃子さんはなのはをぎゅっと抱きしめた。

「もう！誰にも言わないでこんなに遅くまで外に出かけたら駄目じゃないの！心配させないで頂戴！？」

「ごめんねおかあさん・
・
・でも、そのおかげでアイルくんと

おともだちになったよ?」

「確かにそうだけど!・・・もういいわ、許してあげる。けど、ホントに心配したんだからね?今度から気をつけなさいよ?」

「はあゝいい!」

やっぱり親子ゲンカとか意見のすれ違いは家族にとって致命的なんだけど・・・

(なのはの話聞いて心配だったけど、なんだかんだいってもいい家族だよ〜)

『ますます両親が恋しくなりました?』

(・・・すこしね)

『あら・・・デレました?』

(・・・今日帰ったら新しいデバイス作っ『ごめんなさい!』・・・

・・・わかれはよろしい)

と、シュテルと話していると急に背中が温かくなったので何かと振り返ると・・・目の前に桃子さんの顔が!

「ありがとね、アイル君。おかげでなのはがちゃんと家に帰ってこれたわ」

「い、いえ!お役に立てたのなら光栄です!」

・・・こんなに顔が近いと流石に恥ずかしいんですが(汗)

「もうおかあさん!アイルくんにくつついちゃだめ!!それに、わたしはひとりでかえられるもん!」

「あらなのは。アイル君に一目ぼれ?(ニコニコ)」

「つ／＼／＼／＼／＼」

「あら・・・あたっちゃんたかしら?」

「もう！知らない！」

なんか僕のせいでケンカしてるっばいんだけど、謝った方がいいのかな？

『……鈍感^{ボソ}』

「なんかいった？」

『いえ。。。なにも（汗）』

本気でデバイス変えようかしら……そう考えていると、

「アイル君、今日はお礼に夕ご飯食べていって頂戴ね？」

「えッ？いいんですか？まだ出会って間もないのに……」

「何言ってるのよ！子供が遠慮なんてしないの！それにもう他人じゃないでしょ？」

「でも……悪いですし……」

「もう、えんりよしないの！わたしとおともだちだからもうたにんじゃないよ！」

「ほら、なのはもそういつてるんだし！ね？食べていきなさいな」

そうだなあ……あ、そいえば食事の材料とかまだ買っていないし！このまま帰っても夕食ないじゃん！！……ここは桃子さんに感謝だね（苦笑）

「……じゃあ、お願いしてもいいですか？」

「はい！お願いされました♪」

「やった〜！アイル君とおしょくじ〜」

こうして、夕食までの間なのはと部屋で黒ひげ危機一髪やトランプなどをして遊びました。そして時が変わって夕食の時間に……

「あれお母さん、この子は？」

僕の目の前に座っている高校生ぐらいの男の人が怪訝そうに桃子さんに問いかけた。

「彼はなのはの友達で今日引越してきたアイル君よ」

「へえ……出会ってすぐに友達になったのか」

「アイル君はね、なのはをさがしてくれたんだよ」

「探してくれた？どゆこと？」

「今日ちよつとなのはの帰りが遅かったのよ。それでアイル君に探してもらったってわけ」

「ああ、なるほど」

なのはによると、この人はお兄さんの恭也さんというらしい。……シスコンという噂があるらしいがほんとうなのかな？

「へえ、そうなんだ！ありがとねアイル君！！」

で、この僕の横に座っている長い髪を結んでいる女の人はお姉さんの美由紀さんということ。

「俺からもお礼を……ありがとな、アイル」

「いえいえ！ただお手伝いしただけですよ」

「まあまあ、その話はお終い！さっさと夕ご飯をいただきますよう！」

「はい！」

「では」

「……いただきます！」「」「」

その後、夕食後のお茶を交えながら恭也さんと美由紀さんを交えて

4人で談笑を楽しんだ・・・・・・・・・・そして気づけば時刻が9時15分。そろそろ帰らねば・・・・・・・・

「さて、もう夜も遅いですし今日はこれでお暇しますね」

「お暇って・・・・・・・・君はいつたい何歳なんだい？」

「えと、、、5歳ですけど」

「え、うそ！？私8歳だと思ってた！」

「・・・・・・・・それって僕が老けて見えるってことですか？そうなんです、いつも言われるのでわかります・・・・・・・・」

「違う違う！ただ、言葉遣いがすごく丁寧だから・・・・・・・・」

「そのことについてもよく言われます。でも、僕の両親が『目上の人には敬意を払え』というもんで・・・・・・・・」

「ふむ。。。なるほど。君の両親はすばらしい人だな」

「ありがとうございます。とりあえず、今日はこれで帰りますね」

そういつて僕は玄関の方へと歩いていき、靴を履き戸に手をかけると、

ぎゅっ・・・・・・・・

僕の服の袖を引っ張るなのはいた。・・・・・・・・しかも、涙目＋上目遣い（泣）

「あのゝ？なのはさん？・・・・・・・・僕帰れないんだけど？」

「かえっちゃや！」

「・・・・・・・・え？何事ですか？」

「えと、僕帰らないといけないんだけど？」

「かえっちゃやだゝゝゝ！！！！」

うわあああああゝん!!!

僕が帰るだけで泣きます？！普通！！？帰ろうにも帰れないこの状況……どうしよう！

「こらなのは！アイル君が困っているでしょ？」

「……すみません桃子さん」

「いいのよ……ほら、明日また会えるから今日はもう帰らせましょ？」

「うう……グスッ……あしたもアイル君きてくれる？」

「もちろん！明日も一緒に遊ぼうね？（ニコ）」

「うん／／／／／」

「じゃ、桃子さんがとうございました。なのは、また明日ね？」

「はい！またきてね！」

「アイル君ばいばい〜！」

．．．．．なんとか帰ることができた（汗）

さてと、いまから海鳴市立病院だっけ？そこに行きますか！・・・
 ・何のためにかつて？それはもちろん、なのはの悩み解決のために
 ！（かつ新しい魔法の実験w）

「ここかな？ シュテル」

「……この部屋ですね。早速あの魔法を使うのですか？」

「もちろん。そのためにアレを作ったのだから……使わないってのはもったいないよ」

「ですね。出し惜しみしても……ですしね。」

「そゆこと。早く物語を進めなくちゃだし……皆を不幸なこ

とから救うためにもね」

そういつて僕は先日、新しく作った魔法「ヒーリング・アクセル（魔力・体力・その他の病気や呪いなど幅広いものに対して効果を持つ治癒魔法）」を目の前のベットに寝ている男性——なのはの父、高町士郎——に対して『使ってみた』。……試験的に（笑）

すると、すぐに効果が出てきた。

「う……うん……ん？」

長い間意識不明だった彼が目を覚ました。

「あれ、ここは……」

「ここは病院ですよ……高町士郎さん」

「っ！！？君は？」

……そんなに警戒しなくてもいいのになあ……まあ、しょうがないよね。目が覚めたら見ず知らずの男の子が目の前にいるんだし……

「僕なのはの友達のアイルです」

「なのはの……？」

「はい。今日、なのはからあなたのことを聞きまして……」

「なのはが私のことを？」

「はい。実はですね……」

僕はどういうことで士郎さんのことを知ったのか、なぜここにいるのかを士郎さんに説明した。

「…………なるほどね。私のせいで家族が…………」

「でも、今はもう大丈夫です。それに、あなたが目を覚ましたのでもうその心配はないでしょう」

「そうか。。。ありがとなアイル君。なんとお礼を言っていいいか…………」

「いえ、お礼は結構ですよ。ただ…………」

「ただ？」

「…………なのはが悲しむようなことはしない、このことは誰にも口外しない、この二つを守ってくれたら僕は満足です。」

「そうか。わかった。約束はきちんと守ろう。だが、最初の方はもとよりそのつもりだ！」

「ふふ…………だと思いました（ニコ）」

「当たり前だ！私は高町家の家長なのだからな」

「そうでしたね…………あ、それと、再び僕と会うときは初対面ってことにしてくださいね？」

「それはなにか不都合なことがあるのかな？」

「いや、単に人に知られたくないものがあるだけです。御神の剣士…………」

「っ！！？…………ふふ、どうやらそのようだな。わかった、そうしよう」

「さて、僕はこれで帰りますね。まだ体調は万全じゃないんですから無理はしないでくださいね」

「ああ、ありがとなアイル君」

「いえ、では…………」

ガラガラガラ……………ボタン……………

ふう、ようやく眠れるよ……………さっさと帰って寝よ……………

『お疲れ様ですマスター』

「うん、お疲れ様。今日はもう休んでいいよ」
『了解です』

（そだ・・・学校にも行かないといけないな・・・その準備
もしないとな）

こうして転送して最初の大仕事を無事済ませたのだった・・・

・・・そのころ士朗は、アイルが去った病室で

「しかしあの少年いつたい何者なんだ・・・それに悲しい目を
していたな・・・彼の過去に何があったのだろうか・・・」

などと、彼についてすこし考えていた・・・

第2話 本格介入（後書き）

さて、受験生なのに授業中に物語の構想を考えてしまう作者ですw
今回はどうでしょうか？うちのにはまあまあかなって思うのです
が（笑）

他の作者さんを見てみると各登場人物の視点とかありますが、今の
うちにはその技術がないのでしばらくはしません！（えッw）

文章構成に余裕が出てきたら、そのようなパートもしてみますね^
^v

さて今回は、主人公日常編です！物語としては主人公が学校に入学
したりとかですかね？まあ、ネタバレしそうなのでここらへんでw

次回「第3話 人生二度目の・・・」です！

リリカル・マジカル・介入です♪

第3話 人生二度目の……（前書き）

さて、すこし日を置いての投稿です。

今のところ見てくれる人がたくさんいてくれてうれしいのですが、できれば感想なども送ってくれるとうちの励ましにもなりますし、小説を書く際の原動力にもなりますのでぜひともお願いしますね^^
……それにしても、案外たくさんの人に読まれていたのびっくりですwうちのには絶対に読む人少ないと思っていたもので（汗）

では、本編をどうぞ♪

第3話 人生二度目の……

なのはと出会い、土郎さんを助けてあれから約2週間が過ぎた。今では家族ぐるみのお付き合いをしてくれている。その際に、僕が一人暮らししていることが高町家に知られてしまい、一時は一緒にすまないかと誘われたが、僕はすこし考えさせてくださいといって保留にしてもらった。

……別にいいよね？

あと、原作では『シスコン』なんていわれている恭也さんだけど、僕から見たら全然そうじゃないことにすこし驚きました。

つと、それで今は人生二度目の小学校に入学すべくなのはと一緒に受験勉強をしている。それにしても……清祥大付属小学校ってこんなにレベル高いの？……二桁の掛け算や分数計算とか出てくるし……でも、僕は転生者だから何の苦もなく解けちゃうんだけどね（笑）

「うにゃ~~~~!!……アイル君、なんでここに冠詞の a がくるの？」

「えとね、それはここの文章でパイナップルが一つある、ってあるから……」

「……へえ……あ、なるほど！ありがとッ、アイル君！」

「いえいえ、こっちは理科を教えてもらってるからお互い様だよ」

という様に、お互いの苦手科目を補うように日々受験対策をしている……

そして、それらの努力を積み重ねてきてはや一年……ついにこ

の日はやってきた。そう！受験本番なのである！！

「うにゅー……ちゃんとできるかなー？……緊張してきたよッ！？」

「ちょッ……落ち着いてなのは（汗）」

という風に、現在清祥の校門前であたふたしている僕たち……加えて、なのはが緊張に押しつぶされて青い顔をしている。……・ホントに大丈夫なのかな？

「なのは、今までのことを思い出してごらん？いままでたくさん努力してきたよね？苦手なところも僕と一緒にがんばってきたよね？今日はそれらの努力を試す日だっと思って思えばある程度、気は軽くなるんじゃないのかな」

「うん……確かにそうだけど……」

いまだに表情に陰りが見えるなのはに、僕は……

「もうっ……えいつ！」

「へっ？……ふにゃあああー！！！！？」

……抱きついた。すこし混乱してたんでからかうついでにやってみた。まあ、突然だったのでははもつと混乱するだろうけど（笑）

「……ふにゅー／／／／」

「どう？すこしは落ち着いてきた？」

「うん……すこしは落ち着いてきたかも／／／」

そういつて僕はなのはから体を離し、まっすぐなのはの目を見てい

った。すると、最初は赤みを帯びていた彼女の頬は次第に赤くなくなり、なのは自身も落ち着きを取り戻した・・・様に見える。

「にやはは・・・ありがとね、アイル君」

「いえいえ・・・じゃ、中にはいろ？」

「うんっ！お互い、がんばろうね！」

「もちろん！」

そして僕は初めての（転生前も含めて僕も初めて）お受験をしました・・・・・・・・

その後、翠屋にて・・・・・・・・

「僕はまあまあできたかな？」

「へ？アイル君あの問題できたの！？・・・私はできなかったよ
っ！」

「といつても、理数系は満点でしょ？」

「もっちょろ〜ん！得意科目は落とさないよ〜？」

「ふふふ・・・ははははっ！」

お互いの今回の入試についての反省会をしていた。結局、僕たちは難なく今回のお受験を乗り越えたみたいです！・・・結果楽しみな〜♪

そして、合格発表当日。僕たちはいま合格発表掲示板の前にいる。

「やっぱり緊張するね．．．」

「アイル君は大丈夫だよっ！逆に自分のことが心配だよ．．．」

「といつても、ちよつとは自信あるでしょ？」

「にやはは．．．やつぱりわかっちゃう？」

「もちろん．．．何年幼馴染やつてると思ってるのかな？」

「にやはは．．．」

「さてと．．．僕の番号は．．．」

そういつて僕たちは自分の受験番号を見つけるためにいったん別行動をとった。僕の番号は最初の数字が9だから．．．最後らへんかな？

「．．．．．あれ？ない．．．．．」

念のためにもう一度探してみても、僕の番号が見当たらなかった。
．．．

「あんなに自信あるって大言壮語しておいて落ちるって．．．」

すこし目の前が霞み始めたとき、向こう側からなのはが僕を呼んでいる声が聞こえる。

僕は何事かと思いい急いでなのはの元に駆け寄ると、そこにあった掲示板に．．．

成績最優秀者 9 8 7 7 アイル・ステルヴァーグ

合格発表掲示板を見た際には、付属小学校舎1階校長室まで来るように

そう書かれていた。

そのときの僕は、隣にいたのはが何か言っていた事にも気づかず
にただ啞然としていた……

場所が変わって、校長室。

「失礼します！」

「はい！どうぞ」

僕が校長室に入ると、校長先生の机の前には校長本人と他3名の先生方がいた。

……僕はなにかやらかしたんじゃないのだろうか、そう思っているとは意外なお願いをされた。

「成績優秀者であるアイル君に、入学式の新入生代表挨拶をしてもらいたい」

その言葉を聞いて、僕は一度は断ったものの先生方からもぜひやってもらいたいと説得されて、結局やることになってしまった。・・・
・・・新入生代表挨拶って緊張するしめんどくさいのに・・・

その一連の話を聞いたなのはとなのはの家族は口々に、

「凄いじゃないの！がんばってね、入学式楽しみにしてるからね
」！」

と、さらにプレッシャーを与えるに近いようなエールをくれた・・・
・・・

・・・・・・何とかするしかないよね？
いざとなったらシュテルを使えばいいしねっ！

『マスター、私にはその様な機能は「できないじゃなくて、やるの」
・・・はい』

そして、僕はシュテルの助けもあり代表挨拶を見事成功させ、二度目の学校生活のスタートを切った。

第3話 人生二度目の・・・（後書き）

はい！てんやわんやで入学しました！

・・・量が少ないしクオリティー下がりましたねw

でも、これからもつとがんばっていきますので応援よろしくです^^

さて、今回はすこし物語の時間が飛びます。そろそろ本編に入りたいのでしょうがないですねw

いよいよ次回はいいよなのはは覚醒し、アイルも金色の少女と出会います！

次回「第4話 覚醒、そして金色の邂逅」です^^

リリカル・マジカル・介入です♪

第4話 覚醒、そして金色との邂逅（前書き）

どうもです^^

最新話投稿しましたっ！

では、本編をどうぞ♪

第4話 覚醒、そして金色との邂逅

小学校に入学してからかれこれ2年の月日が過ぎ去っていった。さまざまなことが起きて学校での楽しい日々を過ごしていたが、僕はその日々の中で新しい魔法やデバイス形態などを研究したり、作成したりして充実した日々を過ごした。

一方のなのははというと、最近だったかな？新しい友達ができたといつてとても喜んでいた。確か名前はアリサさんとすずかさんだっただけ……僕はあんまり関わったりしないからわかんないのだけれども。今度紹介してくれるらしい。すこし楽しみだなあ。

そして今日は、いよいよなのはが覚醒する日。つまり、ユーノや魔法との出会いを果たす日である。

『それでマスター、どうするんです？』

『どうするって何をどうするの？』

『なのはさんが覚醒した後には介入するのです？』

実は前もってシュテルには僕は転生者だということ、またこの物語の全貌を知っていることを告げている。最初は信じられないなどと言ってはいたものの、なんでも『マスターのことは信じているので嘘ついても私はマスターの指示に従うまでですよ……道を踏み外そうなら私が元に戻してあげますしね』と言ってくれ、笑って？受け入れてくれた。

「実はねシュテル、僕は最初は介入しないつもりなんだよね」

『それはなぜです？いろいろなかき回すのが好きなマスターにしては珍しい…』

「ちよ、いろいろ掻き回すって……一応僕なりの考えもあるんだけどさ。他にも理由があるんだよね」

『ほう。してその理由とは？』

「第一に……めんどめんどくさいと？……まあそうだよ。けど、僕的には今のうちに管理局の裏側の全貌とか知っておきたいし、僕と同じ考えを持つ仲間とかを誘いたいんだよね」

『……管理局をつぶすのですか？』

「最終的にはそうしたいと思ってる。だから、しばらくはその準備のためになのはの手助けとかはしないし、今のうちに面倒なこと……新魔法開発・情報収集・新兵器開発とか済ませたいんだ」

『なるほど……って、新兵器開発ってなんですか！？いままで聞いたことありませんよっ！！？？』

「あれ？……そいえばそうだね、話してないや。実は、僕なりに特製の時空航行船を作ろうって思ってるんだ」

『……ちよつと待ってください。時空航行船？』

「うん」

『特製の？』

「もちろん」

『……今さらですけどマスターの考えってホントに……』

「楽しいでしょ？（笑）」

『難易度高いし高リスクで破天荒ですよっ！！』

「まあ今に始まったことじゃないしいでしょ？一応シュテルを頼りにしてるんだから。頼みますよ、相棒っ！」

『はあ……頼まれてあげますよ、マイマスター』

「じゃあ、僕は今からさっき言ったものの準備をするからシュテルは管理局サーバーから裏情報入手、及び時空航行船の製造に関する

資料の確保を念頭において作戦行動を開始してね？」

『了解です』

「さて、僕も新しい魔法とかを考えますか……なののは魔砲撃よりも強いのをね」

『今よりも強くなるって……いったい何を目指しているんですか？宇宙最強ですか？』

「うーん……なのはみたいな白い悪魔の対になる存在、《黒い死神》かな」

『こりやまた物騒な……』

「まあ強かったら面倒ごと軽く乗り越えられるでしょ。のちのちの計画のためだよ」

『そういうことにしますよ』

「あゝっ、信じてないなあゝ？」

『はいはい、信じてますよ』

「もうっ！」

そうして僕はこれから始まる戦いに向けての準備を始めたのであった。

それから2ヶ月を過ぎたある日のこと。僕の家周辺から強大な魔法反応をキャッチした。おそらくなのはが魔法使いに目覚めたので

あろう。けれど、僕は最初の予定通りになのはが関係する戦闘は極力避けるようにした。

それからまた一週間が過ぎ、僕は海鳴市内にあるとある公園に足を運んでいた。

シュテルがこの公園から微弱な魔力反応をキャッチしたからである。

「シュテル、ここであってるとんだよね？」

『間違いありません。今いるところから3時の方向448mです』

「ほいほい……多分ジュエルシードだよね？」

『その可能性がでかいですね。もしも見つけたらどうするのです？』

「そうだね……確保したら封印して僕が持つておくよ。そしたら多分あの子が来るだろうしね」

『あの子……ですか。もしも出会った場合どうしますか？戦いますか？』

「そうだね……できれば戦いを避け……いや、戦おう。」

『えッ？それはまたどうして？』

「彼女とは一度話しておきたいし、何より僕の今の力を試してみたいってのが本音かな」

『確かに、なのは嬢より腕の立つ人がいいですもんね』

「そそ。だから、そのときはよろしくねシュテル」

『了解です』

そうシュテルと話しながら草を掻き分けて進んでいくと、やはりそこにはジュエルシードが落ちていた。それも2個も……

「シュテル、反応は1つじゃなかった？」

『そうでしたけど……おそらく反応が重なったのではないかと』

「そうなの？……まあいいけどね。シュテル、封印お願い」

『アイアイサッ』

僕たちは二つのジュエルシードを封印した後、近くの雑貨屋に行つてそれらを入れるための小さなビンを買った。そして、今晚の夕食の材料を買いに一路スーパーへと向かった。

ある日の晩、僕は長らく部屋にこもっていたため気分転換にシュテルとともに海鳴公園に来ていた。

「ふう……夜風が気持ちいいね」

『……私は感じるできません』

「……ごめん」

『嘘ですよ（笑）前にその様な機能をつけたのを忘れたのですか？』

「確かにそうだった！もう、こういうからかいはしないでっいつも言ってるのに……」

『すいません。ですけど、私のほうも大変だったんですよ？すこしは見逃して欲しいものです』

「はいはい……ありがとねシュテル。僕は君のようなデバイスを持つて幸せだよ？」

『ありがとうございますマスター。私もあなたのような主にめぐり合えて感謝しています』

「ふふ……ありがと」

公園を吹き抜けてゆく夜風にあたりながら、僕達はお互いの絆を確かめ合っていたのだった。

夜も遅いので僕たちはそろそろ帰ろうとして出口に向かおうとする
と、

『マスターっ！』

「うん…来た、みたいだね」

この公園全体に結界が展開され、その結界内に魔力反応が一つ……
おそらくあの子だ

「シユテル、セットアップ」

『オーライマスターっ！Set up!』

僕は漆黒のバリアジャケットを身につけ、武器である二振りの日本刀（黒龍・疾風）を両手に持ちあたりを見渡した。

すると、上空から一人の金色の髪を靡かせる少女が僕の目の前に降りてきた。

「初めましてお嬢さん。僕に何の用かな？」

「……あなたの持っているジュエルシードを渡してください」

「出会って早々僕に命令口調？……気に入らないね」

「渡さないのであれば、実力行使を持って奪わせていただきます」

「そう……やってみれば？」

僕はそういつて刀を構え……

「シユテル、リミッター30%開放」

『了解、30%開放』

「っ！？」

リミッターをはずしたとたん、少女は驚愕の表情を浮かべ慌てて自身のデバイスを構えた

「さて、実力を持ってジュエルシードを奪うと君は言ったよね？…

…それ、相手を見てから言うようにしないと……死ぬよ？」
「つつつ！」

そう彼女に僕は告げ、風林火山の風の如くあつという間に彼女の首筋に刀を持っていった。それも速さに特化した彼女自身が反応できないような速さで……

「つく！」

少女は身を翻し僕との距離をとった。それに彼女は先ほどとは別人のような気を醸し出していた。

「さて、これが欲しいのであれば僕に全力でかかってきてね？そうじゃないとあつという間に負けちゃうから」

「……私はあなたを甘く見ていた。けれど、それはここまで。この勝負に勝って、母さんのためにジュエルシードを手に入れるっ！」

「その意気だ……さあ、はじめようか！」

こうして僕は金色の少女との出会いを果たし、彼女との戦いに身を投げたのであった

一方、シュテルはというと

『……マスターって戦闘狂なのかな？（汗）普段と全然違うからなんか怖い』

といって身を震わせていたのであった……しかし、デバイスなのに身を震わすって？

えっそこは気にしては駄目？……そうしたほうがいいようですね
汗)

第4話 覚醒、そして金色との邂逅（後書き）

さて、ついに金色の少女との出会いを果たしましたっ！
もう皆さんお分かりですね？そう、あの子ですよ！

つと、今回は何もいうことないのでちゃっちゃと次回予告に行きたいところ……。ですが、次回は新たな主人公設定を投稿します^^

お話の続きを期待していた方にはごめんなさい；；
少々うち自身も整理しておきたいもので^^；

ということで、主人公設定をぜひ見てください♪
……。さらにチートが掛かってます（苦笑）

主人公設定 その2（前書き）

いろいろとうち自身も混乱していたので、ここらでいったん整理したいと思いますっ！

前よりチートになってるような・・・？

主人公設定 その2

主人公 アイル・ステルヴァーグ（本名：如月陶冶）

身長 123cm 体重 20kg 目の色 藍色 髪の色 肩
までかかるやや長髪

性格 温和で明るい性格だが、敵とあれば容赦はしない。また、自分の大切な人や仲間が傷つけられたりしてしまったら、温和な性格が急変しその相手に対して残虐非道な正確になってしまう。また、理不尽なことに対してもそうなってしまう。だが、基本は人当たりがよく友達を作るのには苦労しない。

容姿 若干女顔でどんどん髪が長くなっていくことからよく女の子に間違えられるようになる

魔法ランク SSS以上（いわゆるEX）

日常においてはリミッターにより、ランクは最低レベルのFになっている

レアスキルのレベル EX

身体能力（筋力・持久力・視力などもろもろ） EX

魔法形態 ミッドチルダ・古代ベルカ式

攻撃タイプ 近・中・遠を両方こなすが、どっちかって言うと遠距離型（なのは系w）

魔法色 様々（赤・青・白・黒・虹色・黄色・桃色・その他）

だか、基本的には黒色である

魔法変換資質 焰 氷 雷 （得意なもの） 特別なものとして、
闇（これはあるものを消費する）

魔法技

ラインボルト

神速のような速さをもって敵を切り裂く普通の技

ツバメ返し

これは説明不要・・・だよね？

カラ・ブルリスク

一回の発動あたり数十個の魔法弾からなる中規模広域誘導魔法弾

シュワルツ・ベルン

50以上もの誘導魔法弾からなる大規模広域殲滅用魔法。これが発動すると、半径2キロは焦土と化す

黒龍滅翔波

二つの日本刀（黒龍・疾風）を用いて繰り出す技。これは魔法を用いるよりも氣を用いたほうが威力が高い。だか、魔法を用いて攻撃するだけであたりは焦土と化す

エミン・リ・ラグナロク

3つのレベルを持つ最大魔法砲撃。レベル1だけでなのはのスター
ライト・ブレイカーの1.5倍を誇る。

ただし、レベル3を放つとその反動が大きいためしばらく満足な戦闘を行うことができない。

レアスキル一覧

・イミテーション

一度見た技をコピーする。しかし、再び使うにはデバイス登録、及びそのワザを練習することが必要。

アインリミテッド・クリエーション

・無限生成

無限かつ何でも生成可能。デバイス・ユニゾンデバイス・魔導書・etc

・ ??? ?

これが発動するにはあるものを犠牲にしなければならない。

デバイス インテリジェント・デバイス（シュテル）

魔法ランク SS

マスターであるアイルをサポートするために作られた。デバイスには様々な機能が埋め込まれているが、その中で目立つものは感情などを普通の人間に様にあらわすことのできる機能、人間のような身体組織を持つ姿になれる機能などほかのデバイスには見られないような機能がある。これはアイルがシュテルを思っていること。

形態

フォーム1 二振りからなる日本刀（黒龍・疾風）

フォーム2 ニ丁のハンドガン。見た目はデザートイーグルっぽい。

フォーム3 ????

主人公設定 その2（後書き）

一応、現時点での設定は以上です。

これからまた新しいキャラが出てくるので忙しいですw
その分楽しいんですけどね♪

次回予告っ！

アイルは金色の少女と戦い己の力量を知る。また少女は己の非力さを知り、悲観にくれる。しかし、少年の言ったある言葉で少女は変わる。

またある少女も何のためにジュエルシードを集めるのかをアイルによって気づかされる。そして、ある日の夕暮れ。二人の少女は出会い、戦いに身を投げていく……

次回「交える刃」

リリカル・マジカル・介入です♪

第5話 交える刃（前書き）

最近学校が忙しく、なかなか続きをかけませんでした（泣）
続きを楽しみにしていた皆さん、そうでない皆さんもごめんなさい
っ！

まあ、なにはともあれようやく書き終えたので投稿ですっ！

では、本編をどうぞ♪

第5話 交える刃

あれからどれぐらいの時間が過ぎ去ったのであろうか。おそらく一時間は軽く過ぎ去ったはずだ。僕が対峙している少女は、時間が経つにつれだんだんと己の獲物を振るう速さや鋭さが著しく落ちてきている。一方の僕はあまり力を出していない所為なのか、息切れさえしていない。

「はぁ…はぁ…つくー！」

「そんな太刀筋じゃ僕には一太刀も当てられないよ？……そらっ！」

僕は彼女の攻撃を避けながら幾度も背後や懐に回りこみ、彼女を切りつけていく。それを先ほどから何度も繰り返しているため、彼女のBJはところどころが裂けており、その場所からは赤い切り傷がたくさんできていた。

「君はもう立てないみたいだし……もう、終わりにしようか」

「な、に？私は、まだやれるっ！」

「口先ではなんともいえるけど、今の君の姿を見て誰が信じると思う？」

もう彼女は自力で立つことはできないのにもかかわらず、デバイスを杖代わりにして立っていた。それに、こっちとしては弱い者虐め

をしている様で正直気分が悪い。

『（それはマスターが強すぎだからですよっ）』

「（正直ここまでだとは僕も思わなかったんだってばっ！）」

『（それにマスター、終わらせるならさっさとしたほうがいいですよ？ここから南東に6キロの方角から急速に接近する魔法生命体の一つありますので）』

「（おそらくそれは彼女の使い魔だね……大丈夫。すぐに終わるよ）」

僕はシュテルの言葉を聞いて、彼女を魔力ダメージで気絶させるために一撃必殺の技を構えた。

「これでお終い。相手を見くびると痛い目を見るってこと、己の身をもって知るといいよ……」

「……何があっても、母さんの願いの為、絶対に……つく……負け、ませんっ！」

「その心意気は賞賛すべきものなんだけどね」ホントに（ボソッ）……っは……」

周りに吹き荒れる風のように、僕は彼女の懷にもぐりこみ……

「秘剣……燕返しッ！……」

「つつうあ！」

彼女は僕の技を受けた後彼女の体が吹き飛び、僕よりすこし離れたところにある大きな木にぶつかった。近づいてみると、彼女にはもう意識がなく苦悶の表情を浮かべて力尽きていた。

「ふう、やっと終わった」

『途中遊んでましたね？ たく、戦いは真剣にやるようにっていつも言ってるのにっ！』

「だってさ、対人戦は初じゃない？ だからすこし緊張しちゃって……」

『…緊張してなかったくせに』

「やっぱばれたか（笑）」

『バレバレです。精神回路とかもマスターとつながっていること忘れてません？ …まあ戯れはこれぐらいにして、この少女どうします？』

「うーん、一度僕の家連れて行くか。治療とか話とかもしたいしさ」

『了解です。転送で行きますよね？』

「そっだよ？ わざわざ歩いていくって面倒くさいことはしないよ」

『……現代っ子ですね』

「今ある技術を有効活用しているって言って頂戴よ……」

『ないですね』

「即答っ!？」

戦いの後にもかかわらず、僕とシュテルは普段と変わらない調子なのであった。その後、僕は彼女をいわばお姫様抱っこで持ち上げ転送で自宅へと帰ったのであったそれも、先ほどシュテルが感知した魔法生命体のことを完璧に忘れて……

僕は家に着いてすぐに彼女をベットに寝かし、治癒魔法を使って全快させた。途中シュテルが『襲うんですか？襲いますよね？据え膳食わねば男の恥って言いますもんね？』と何回も言っていて、本気でぶっ壊そうかと思うぐらいにウザかった……

そして、朝日が昇り始めた頃に彼女は目を覚ました。

「…ここ、どこですか？」

「僕の家だよ。すこしやりすぎたって思ったから家に連れてきたんだ。それにちょっと治療もしたかったからさ」

「…ありがとうございます」

「いや、僕の方こそやりすぎたからこんなことになっちゃったからさ、気にしないでいいよ」

『そうやって女の子の警戒を解いておす「うるさいよ？」…なんでもないです、はい』

「それで、君の名前は？」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「僕はアイル・ステルヴァーグ、民間人だよ。この子はデバイスのシユテル」

『ちやお〜』

「ちや、ちやお……？」

「…気にしないでいいよ、単なる挨拶だから（苦笑）」

「はあ…そいえば、民間人って言いましたよね？なぜあなたはつよい魔力を持っているんです？」

「……ごめんだけど、それは『今』は言えない。けど、これから僕

は君たちの味方になるつもりだから追々話すよ」

「えッ？」

「…迷惑だったかな？」

「いえ…なんで私たちの仲間になるのかがわかんなくて…そっちにメリットはありませんよ？」

「単に君の戦い方とかちょっと危なっかしいからさ、一緒に模擬戦とかして直したいんだよね。このままだと、確実に怪我するし」

「でも…」

「それに、こつちとしても戦闘技能や経験をつむことができるから一石二鳥だよっ？」

「…わかりました。これからよろしくお願いします、アイルさん」

「アイルって呼び捨てにしてもいいよ？多分僕と同じ歳だと思うし」

「…うそっ」

「……この反応ちょっと傷つくんだけど？」

「いえ、ちょっと言葉とか大人みたいだっと思ったから…あと、アイルって女の子？」

「……」

『ここに来て初めて女の子に間違えられましたね、マスター？』

「…はあorz、僕は男だよ！」

「ご、ごめんなさいっ！髪がすこし長いし顔が…つい見間違えちゃった…」

「もついいよ、気にしないで…」

「…はい」

「ところで話は変わるけど、君って使い魔を持っていたりする？」

「はい、一応いますけど？」

そっいつてフェイトはちょこんと首をかしげる。…かわいい／＼／

「じ、実は、君をここに運び込む前に反応があつたことをいまま思い出してさ（汗）」

「はあ………」

「つまりその…おいてきちゃったんだけど、連絡とかは大丈夫？」

「……あ」

「その様子だと君も忘れていたみたいだね」

「つつつつ／＼」

「まあおいおい連絡を取るといいよ」

「あう…そうします」

そうして僕とフェイトは協力することとなった。ちなみに、ジュエルシードなどは見つけたらすぐにお互いに報告するという約束もした。

蛇足だが、あの後フェイトと連絡を取った使い魔に背後から襲われた…… 返り討ちにしたらけど（笑）

フェイトと出会ってから一週間が過ぎ去った。僕はあの日からフェイトとともに魔法の練習や模擬戦・魔法論の研究、新技開発をしたり、管理局の裏事情などを学んだりしている。例えば、一度プレシアのほうにも顔を出さないといけないね…… すこし気が重いけど、ともあれ、なのはのほうも順調にシードを封印しているみたいだし、僕はしばらくなのはとフェイトの関わる場面には関わらないようにしなきゃね。何よりも、いつまでも『計画』を滞らせないようにするために…… できれば無印が終わるころには8割がたぐらい完了させるようにしないと……

ともあれ、僕はいまフェイトとアルフ、デバイスのシュテルとともに今の生活を楽しんでいます！

……明日あたり、プレシアのどこに行ってみようかな？

第5話 交える刃（後書き）

ようやく書き終えました〜^^；

なかなか時間を見つけきれない今日この頃ですw

次はもう少し余裕があればいいんですけどね…

次回予告

とある計画の一部が明るみに！？そして、ついに満を辞してあの方が登場！

第6話「転生者と大魔導師」

リリカル、マジカル、介入です♪

第6話 転生者と大魔道師（前書き）

親と子はとてつもなく強靱な絆で結ばれている

それは時に儚く、尊いと同時に脆く、少しでも輝が入ってしまうとひとたびに崩れ去ってしまう

それを一から取り戻すのはとても難しい——そう、思いませんか？

原作とは違うもう一つの物語・・・親が子を思う今回の物語、今始まります…

第6話 転生者と大魔道師

いまごろフェイトはなのはの友達、すずかの家の庭でなのはと初めての出会いを果たしているだろうと思われる今、僕ことアイルはフェイトのお母さんであるプレシアに会うために『時の庭園』を訪れている。正直、すこし気が重いし怖い（笑）けど、これもフェイトとプレシアの未来のため、何よりこれから先の『計画』のため、がんばらないといけないねっ！

「で、やっと乗り込んだんだけどさ…広すぎない？」

『そりゃ〜「庭園」って言うぐらいですから当然かと』

「そうだね〜…しかし、どうやって大広間まで行こうか？」

『手当たり次第に歩けばいいのでは？』

「まあ、気持ちを落ち着かせるつもりでゆっくり探そうか」

原作でも広いと思っていただけ、いざ実物を目の当たりにすると規模が違うことにびっくりした。

…にしても広すぎ（汗）

く プレシア side

「…なにかしら、侵入者？」

私はふと庭園内に感じた事のない微弱な魔力を感じた。…けど、なんなのかしらこの背筋が冷たくなるような感じは。いままでさまざまなタイプの強い魔導師と戦ってきたりしてきたけど、これは比べ物にならないくらいすごい威圧感を感じるわ…。用心、しておいた方がいいかもね。

そう思つて庭園内の戦闘機械を出そうとしていたら、大広間の壁が吹き飛ばされて一人の女の子っぽい？のがなにやら愚痴をこぼしながら出てきた。

く side end

歩き続けて約1時間、大広間にたどり着く気がまったくしないのは何でだろう。

「ねえシュテル、いつになったら着くの？」

「わかりません。けど、マスターが大広間からどんどん遠ざかっていくのは確かですよ」

「やっぱりなあ、そんな気がし……ちょっといいかなシュテル君」
「？」

『はい？』

「なんで『遠ざかつてる』っていえるの？」

『（ギクツ！）え？い、いや、私もそう思ってい「シュテル？」…すいません、場所はすでに把握してました…』

「…デバイスつてさ、マスターを補佐する立場なんだっけ？」

『そ、そうですよ？（滝汗）』

「ならさ、大広間の場所を把握していたんなら、マスターである僕に知らせるべきじゃないのかな？かな？」

『なぜにここで某ひぐらしの「ねえ？」はいいッ！！そうです！そうでしたッ！！』

「…家に帰ったら、お仕置きねッ」

『い…いやああああッ！！！？』

「数十分経過ッ」

「で、場所は？」

『ここから北西の方角、距離は50メートルです、sir』

「ほいほいッ」

『…つかぬことをお聞きしますがいいですか？』

「な〜に〜?」

『なぜ鼻歌歌いながらデバイスセットしてるんですかッ!?』

「いや、道を曲がったりしてあっち行くのが面倒だから一直線に行こうかと」

『いやいやいや!何するつもりですか!?てか、自重してくださいよ!?』

「う〜ん、無理」

『笑顔で言わないでっ〜!?』

「も〜、いちいちうるさいなあ〜。ついでにセカンドシフトの性能を確かめたいしいいでしょ?元はといえば、シュテルの所為なんだからね?」

『コメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ…』

「うん、わかったのならよしっ!」

よし、ここらへんでぶっ放してもいいかな?いいよね?えっ、なにをって?そりゃ〜・・・お楽しみだよ〜♪

「じゃシュテル、セットアップ!」

『わかりましたよ…stand by ready set up』

そうして僕は漆黒のBJを纏った後、デバイスをセカンドシフトに移行させ二挺の銃（外見はデザートイーグル）を手にとって、照準を定めた。

「いつちようやりますかっ！受けてみて！僕の切り札、すべてを打ち抜く光！」

『ちょ、いきなり大技ですかっ！？』

「LV1！エミン・リ・ラグナロクっ！！！」

そして、僕の放った砲撃は壁に数寸も変わらずに命中し、大広間の向こう側が見えるぐらいの大きな穴が壁に空いていた。

「……………これってやばくない？」

『…やばすぎ、ですね』

「って、リミッターつけたのにこんなに威力強いのか？」

『だからいったのにつ！』

「きいてないよっ！？」

「…痴話げんかはいいいけど、この壁の穴どうしてくれるのよ？」

『「…えッ？」』

僕とシュテルが言い争っているときに、正面には驚きあきれた様子の？プレシアがいた。

「まあ、いいわ。直してくれるんなら」

「ごめんなさいっ！」

「いいわよ、もう。はあゝ…侵入者を実力で排除しようと思ったのだけれど、こんな力の差を見せられてはもうやる気も出ないわよ」

『あははゝ、まあうちのマスターはチートに近い人ですから』

「いや、もうチート以前の問題よ？これ」

「…もういわないで（涙目）」

なぜこうなった？

なぜに初対面のプレシアにあきれられ、シュテルとともにいじられ

てるの？

「シュテル、あなたのマスターってイジリがいがあって面白いわ〜」

『でしょでしょ？面白いからやめられないんですよね〜これ』

「なんでこうなるんだ〜！」

しばらくして、僕は壁を直してプレシアからお茶をいただいた。え？何で親しくなったのかって？なんだかんだで仲良くなったんだよ。魔法理論について語ったり、いまの魔法体系の弱点を見つけたり、管理局の愚痴を言ったりe t c

「で、ここに何しに来たの？」

「急にシリアスに（汗）……実は、貴女に僕のある『計画』に参加して欲しいんだ」

「へえ〜『計画』、ねえ〜」

「口頭での説明はできないので、デバイスにその計画書を送るね？
…シュテル、お願い」

『了解です！…送信しました〜』

「ん、ありがと。ちょっと見てみて？」

「わかったわ…」

そういつてプレシアは自分のデバイスに送られてきたデータを確認し始めた。その間、僕はお菓子を食べたり紅茶をのんだりとしばらくくつろいでいた。

しばらくくつろいでいると、部屋の奥からものすごい音を立ててプレシアが出てきた。なぜに汗をあんなにかいてるのか知らないけど。

「ちょ、アイル君！これって実行できるの！？」

「心配？」

「心配どころか…不可能よっ！」

「しょうがないなあ…じゃあ、これを見ても同じ言葉を言えるの？」

そういつて僕は『あるもの』を写した画面をプレシアに見せた。

「っ！これはあの計画書にあった《時空航行・突破強襲用戦艦　アークエンジェル》…！」

「そ、もうできてるんだよね」

『といつても、まだ8割なんです。それに、これが完成してもまだ全体の5割に満たないですよ？』

「…あんたたちってホントに規格外だわ」

「まあ、実際そうだけどね。それで、どうするの？参加してもらえる？」

「参加してもいいけど、そっちにメリットはあるのかしら？」

「僕としては『条件があるが、アリシアをよみがえらせる』という報酬でいいのかなって思うんだけど？」

「私はそれでいいの。アリシアがいてくれば、それだけで報酬以上の価値があるから……」

「そう。けど、そうなるとフェイトはどうするの？」

「何言ってるの？あの子も私の娘よ？しかもアリシアの妹になるわ」

「…え？」

あれ、なんか原作とすこし違うない？…でもいいや。いい方向に原作が変わっているのならそれでいいや」

「…どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

「で、私からはどのようなことをすればいいのかしら？」

「あなたが持っている知識や技術を僕に教えたり、管理局を倒すための兵器を使ったりして欲しいんだ」

ん？なんで目が点になってるの？僕、おかしいこといったのかな？

「…それだけ？」

「ん、いまんとこそれだけ、必要とあれば、こっちから指示を送るから」

「そう、わかったわ」

「参加してありがとね、プレシア」(ニコ)」

「つつ！…い、いいわよこれぐらい！／＼／」

うーん、何でだろ。なぜか知らないけど僕が笑うと皆顔が赤くなるんだよね…おかしいのかな？

『（それに気づかないところが、アイルクオリティー《鈍感》なんですけどね）』

あれからいろいろ楽しくたわいもない会話とお茶を楽しむが、ふと時計を見ていると長居すぎたと思って今回の目的を果たした僕はフェイトのいるマンションへと帰ろうと席を立った。

「あら、もう帰るの？」

「ん、そろそろ帰らないとフェイトも心配するし、この後フェイト

とアルフの魔法の特訓に付き合う予定だからね。そろそろ帰らないと間に合わない…かな？」

「あ…なるほど、ようやく合点したわっ！」

「ひゃっ！、突然叫んでどしたの？」

「なんか最近フェイトの魔力が強くなったり、戦闘がうまくなったりと、以前のフェイトじゃないから何かあったのかと思ったら…あなたが魔法戦闘の指導とかしていたのね？」

『そですよープレシアさん。前に一度、マスターが襲われたことがあったんですけど、それ以来マスターはフェイトさんのマンションに住み込み、家事などをしながら一緒に魔法の特訓をしているんですよー』

「へーそうなの…って、住み込みって同棲してるの!？」

「?一応そうですけど…なにか問題でも?」

「問題というか、なんともうらやm…もとい、同棲は危ないでしょう!？」

『あープレシアさん、そういうことは起こる可能性が低いかと』

「…理由を聞きましょうか?」

『…マスターですよ?』

「……納得したわ」

「はやっ！何！？僕を見てそう何回もうなずいてるの！…？？」

「『そりゃ、アイル君（マスターですから）だからね』」

「…なんだか理不尽だっ！！」

「っと、まあイジるのはそれぐらいにしてっ！はいこれ」

「もういいよ（泣）…なにこれ？ケーキとゼリー？」

「そうよ、むこうでフェイトとアルフと一緒に食べてね」

「プレシアありがとう」

「いえいえ」フェイトにもよろしくね」

「了解っ。じゃあね！」

「バイバイ」

『プレシアさん、また今度っ！』

こうして、目的を果たした僕とシュテルは海鳴市のフェイトのマンションへと転移して『庭園』を後にした……

……はずだった。

「……ううど。」

ついたと思っていた僕が目を開けると、そこに目の前に広がるのは以前転生前に來たような白い空間が果てしなく続くところだった。

第6話 転生者と大魔道師（後書き）

マイ「投稿が遅れてホントにごめんなさいっ！」

アイ「いや、作者は受験生だから仕方ないよ」

シュ『でもさすがに一ヶ月はないかと…』

マイ「orz」

アイ「あちゃ〜…作者が落ち込んだじゃったよ。…代わりに僕が次回予告をつっ！」

アイ「とある白い空間に移ってしまつたアイル。そこでアイルは自分の真の生い立ちと倒すべき敵が判明するっ！」

次回 第7話「己の本当の姿、そして倒すべき敵」

リリカル・マジカル・介入です♪」

マイ「…皆さん、ホントにごめんなさい（泣）」

アイ・シュ『もう大丈夫だつてっっ！』

第7話 己の本当の姿

「……………」

自分の家に着いたと思って目を開けると、そこには転生の際に最初に僕がいた場所だった。

「ねえ、シュテル？ここどこか…って、デバイスがない!？」

シュテルに今の状況を聞こうにも、デバイスがないことにいまさらながら気づく。けれども、このままと

いうわけにもいかず出口を探すために僕は歩き始めた。…………どうするのよこれ……

One Hour Later

「——するのじゃ？」

「ん？向こう側から何か聞こえる？」

しばらく歩き回っているうちに、聞きなれない声と懐かしい声が聞こえてきた。どうやら向こう側に見える

大きな扉の向こうにいるようだ。

「やっと見つけたっ！早くもこの世界に戻してもらおう」

そう思つてその大きな扉の取っ手に手をかけたときに、より大きな声――アリアの悲痛な声が聞こ

えた。いや、聞いてはいけないことを聞いてしまった。

「彼…あの子は私の■ ■なのよっ！？どうしてそんな酷い事をさせようとするの！？」

「っ！？」

僕は雷に打たれたような衝撃を受けてその場から動けなくなった。いや、指一つさえ動かすことがままな

らなかった。背中には冷たい汗が流れるのが手に取るようにわかり、またその汗で服と肌がべったりとく

つついているのがよくわかる。

「あの子を下界に降ろしたのも、他の神々との争いを避けるため…
…なのに、なんで！？なんでいまさら

彼を巻き込もうとするの！？争いを避けるために下界に彼が降りることに賛成したのは誰！？今それを無駄に

しようとする貴方よ!？」

「わかってくれ…アリア———今あの方が『居なくなつて』しまつた今、この天界を…世界を纏める力

があるのはあの子しか居ないんだっ!」

「でもっ…でもっ!!なんで…なんで今なの!?!私はあの子にシアワセな人生を歩んで欲しいだけなのに…

なんで私たちの都合でそのシアワセを取り上げようとするの!?!ねえっ、答えて——アポロンっ!」

———
っっ!

その時、僕のポケットから一つのジュエルシードが零れ落ちて——
——小さい音だったが、この空間内に

響き渡らせるには十分な音だった。

「———っっ!!誰っ!!?!?」

くアリア sideく

「——っっ！！誰っ！！??」

私たちが言い争っているときに突然響き渡った一つの音——この空間内には私たちしかないと思っ

ていた私とアポロンにとって、警戒を抱かせるには十分な音だった。

……だけど、それ以上にその音を立

てた人物が、私たちをさらに驚かせた。……すこし開いた扉の隙間から、『あの子』が出てきたのだから

くside endく

「ねえ、その話ってどういうこと?」

僕は部屋に入って開口一番にこういった。あの言葉の意味、僕の…
『本当の』僕の正体を、もう一度確かめるために…

「それを話す前に、この『天界』について話さなければならぬな」

「っ！ここが『天界』！？」

「なんだ…俺は最初にここに飛ばされたときにアリアに教えてもらっていたと思っていたんだが？」

そういつてアポロン？はアリアを白い目で見ろ。そのアリアはとうと…

「…あ」

あのときにそのことを教えていないことを今更ながらに思い出したようだ…

「…アリア…」

「うゝ！そんな目で見ないでよっ！いくら女神だっていつても一つや二つ忘れたりすることぐらいあるわ

よっ…」

「確かにね〜…人を故意に殺しちゃうほどのドジッ子だもんね〜」

「そ、それはいつちゃ駄目〜!」

「ほうアリア…俺はこの子があの世界では周りに迷惑が掛かるから他の世界に転生させたと聞いたんだが

」?

「!!(ギクッ)」

「これはいくらかOHANASHIせねばなるまいな〜」

「ひいッ!」

「つとまあ、その話は一応おいといて「おいとくの?」まあな。後ですこしお灸をすえねばならんしな…」

…別の件で」

「さいですか…」

「ぶしゅ〜」

——アリアは人型からスライムに進化したッ!

「で、だ。これから話すことは真実だから安心して聞くように」

「わかりました」

ちよつといろいろ長いのです。こしアポロンの話を要約すると・・・

—— 今から何万世紀も前に3つの世界ができた。その世界は順に天界・下界・絶界。天界は下界に住

まう人々で言う「天国」というもの。そこで暮らす人は不老不死はもちろんのこと、大神であるゼウス・

閻魔であるラグスの審判で適する職業に就いて生活している。そして下界とは… いわずもがな皆？が知っ

ている世界。最後に絶界とは、他の二つ——そしてその他のあらゆる世界から隔離された誰にもそこに立

ち入ることが許されない世界。そこには前世で犯してはいけない罪を犯した者——それは天界でも同じ——

——がたどり着く場所。

この天界においての序列は最高神ゼウスを筆頭に連なっていく。ちなみにアポロンは第六位で、アリアは

女神第三位。

「とまあ、そういう感じだ。大体わかったか？」

「ええ。大方把握しました。」

「それじゃ、さっき話してたことに関する昔話をしようか…」

—— 今から二千年前、ここ天界に一つの大規模な戦争があったんだ。

その相手というのは本来ここに現れることのない世界から進入してきたんだ。

彼らの目的はここ、天界の掌握。長年たまってきた鬱憤やらを晴らしたかったんだろうね。もちろん天界

側は全力を持ってこれを阻止、壊滅させたんだ。けれどそれから数年後、ある日突然最高神であるゼウス

が忽然と姿を消したんだ。俺たちはありとあらゆる手段を使って彼を探そうとしたのだけれども、結局見

つからないままで今に至るんだ。といっても、代わりに次席の奴が天界を纏めてくれていまの状態がある

んだけどな」

「…その『本来表れることのない世界』から来たって…まさか」

「そう、そのまさかだ」

「そうよ——絶界よ」

「ッ!？」

僕は先ほどありえないといったことが起きたことに驚きを隠すことができなかった。それに、あのタイミ

ングで最高神が姿を消すということはつまり——誘拐か暗殺か…

「おそらく君の考えてることの后者は違うとおもっ」

「…考えつて読めるもんなの？」

「いや、神に常識を求めるほうがおかしいわ」

「…それもそうだね（汗）」

「で、だ。ここから君の話になる。……別に今聞いて欲しいというわけではない。ある程度覚悟が必要だ

からな…これからの己の未来がこれで決まってしまうんだ。容易で聞くようなものじゃないよ」

「これで将来が…僕の未来が変わってしまうのならば、なおさら聞かないと…今利かないといけない気が

します。それに、僕はもう覚悟はできています。その時、アリアが僕を他の世界に転生させてくれた際に

『何があってもすべてを受け入れる』ってね」

そういつて僕は二人に笑いかけた。

＼side アリア＼

「で、だ。ここから君の話になる。……別に今聞いて欲しいというわけではない。ある程度覚悟が必要だ

からな…これからの己の未来がこれで決まってしまうんだ。容易で聞くようなものじゃないよ」

「これで将来が…僕の未来が変わってしまうのならば、なおさら聞かないと…今利かないといけない気がする

します。それに、僕はもう覚悟はできています。その時、アリアが僕を他の世界に転生させてくれた際に

『何があってもすべてを受け入れる』ってね」

「…ほう。これは予想以上だな。なあ、アリア？」（ニタニタ）

「…／／」

そんなかつこいい事いいながら微笑むなんて…兵器以外のなんでもないじゃないッ！！

「んんッ！それじゃ、今から貴方にとって…私たちにとって大切な話を聞いてくれるかしら？」

「もちろんです」

「そうね…前置きなんかこの際いらないわね。いい？よく聞いてね

？
あなたは

の
「よ」

私と大神ゼウスとの間に生まれた子供な

～
アリア Side End
～

く
アイル S i d e
く

「そうね…前置きなんかこの際いらないわね。 いい？よく聞いてね
？あなたは——

私と大神ゼウスとの間に生まれた子供な
のよ「

.....えっ？それって――

「そう。貴方はもともと人間でもない…神体…いいえ、こういつたほうが正しいでしょうね。――」

―貴方はこの世界を統治するべくして生まれてきた存在なの―

「…それって何の冗談？そういうなら、僕には「神の力」に近いものがあるはずでしょ？それに、そんな

の記憶にないし前世の記憶だって、あの人達が両親だっていうことは覚えてるよ？」

「下界に落とすときは記憶はもちろんのことその「神の力」は封印するか篡奪するのが普通よ。けれど、

貴方の場合はさっきも言ったとおり、「世界を統治すべくして生まれた」存在だから、その力は貴方の体

の奥深くに封印しているわ。あと、転生時に能力をあげるって私は言っただけね？」

「…うん、そういつてたけど？……まさかッ？」

「うん、貴方が考えている通りよ。私はただ貴方の封印をすこしだけ解いただけ。…まさかこんな風な強

さになるとは思わなかったんだけどね（苦笑）」

「あはは…そうなんだ」

それから僕たちはすこし休憩をかねてお茶を囲んで談笑した。僕が生まれたときはああだったとか、お父

さんであるゼウスはとんでもない失敗をしてアリアに怒られたとか、アリアの失敗談とかね（笑）

それに二人の馴れ初めを聞いたとき、アリアがトマトみたいに真っ赤っかになって面白かったよ

それからすこし時間が経ち張り詰めていた空気がなくなったところで、アリアは真剣な表情を取り戻し、

僕に口を開いた。

「で、ここからが本題よ」

「うん。…といっても、おそらく「神の代行」をするんだろぅと思うけど」

「正解♪といっても、神界ですることとは何もないわよ?」

「ん?というと僕は何するの?」

「それはもちろん…」

「もちろん?」（滝汗）

「『下界に降りてくる反乱分子と転生者の排除』をお願いね」

へえ、やっぱりそうなるよね。反乱分子を倒さないといこの世界が消えちゃうかも知れないしね……ん

？ちよつと待つて。『転生者』！？

「ちょ、アリア！？」

「ん？なにかしら？」

「『転生者』ってなんなの！？反乱分子がいるって事しか聞いてないよ！？」

「あ、ごめんね？話し忘れてたわ「忘れないでよッ！」「んもう、いいじゃない今から言うんだし」

「…それじゃちやつちやと話してよ」

「はいはい…絶界といえどもね、下界には干渉できるものといないものがあるの。で、干渉できないもの

は死んでしまつて黄泉の道を通つて閻魔のそこに行く魂を適当にさらつてきてすこし能力をつけて下界に

落とすの。天界ではそれを『転生者』つて言うわ。むしろ、『転生者』は絶界の人達しか作らないから、

下界に下りてもし転生者を見つけたらすぐに殺して頂戴」

「殺すつて…もうちよつとオブラートに包んでも………うん、了解」

「あ、あと今いる『リリカルなのは』の世界だっけ？そこにいる反乱分子やらを排除したら違う世界にも

行つてもらふからね」

「まあしょうがないよね…下界はこの世界を中心に網目模様のよ
うに広がっているもんね？」

「そうよ。それで貴方にいつてもらふ世界は主に他の神々が手をつ
けられない世界よ。だけどあまり多く

ないから安心していいわ」

「んゝ、了解っ」

「で、それで貴方に掛かっているリミッターは全て取り外している
から誰にも負けることはないわ」

「へ？リミッター無しでそこまで強いのか？」

「…おいおい何を言ってるんだ？」

「アポロン？」

なぜかアポロンがあきれた表情で僕を見るんですけどっ！？僕何したのよっ！

「「神の代行者」に大神ゼウスの息子だぞ？強くないければどうするんだ」

「あゝ…ちなみにその強さとは？」

「…俺とアリアが一时间持つかそれぐらい」

「はあ！？」

「もっと簡単に言えば、でこピンひとつで山が跡形もなく吹き飛ばぐらい？」

「なんという…」 or z

封印を解除するだけでそこまで強くなるのか…うん、力加減をつけ

るために練習しようっ！しないといろ

いろと…いや、全体的にやばいっ！！

「ということで、言わないといけないことは終わったしもうもどつていいわよ」

「うんわかった…ところで、僕に与えられた力って何かな？」

「それは俺から説明しようっ！」

…なぜどや顔なの？なぜそんなに目を輝かせているの？

「ごめんね、アポロンは『力』のことになるとこうなるよ」
(苦笑)

「なるほどね…じゃあアポロン、教えてくれる？」

「良し来たっ！さっき封印を解除してアイルが手に入れた力は『神なる知恵』と『世界を守護する力』の

2つだ。前者は知らないことがないというほどの知識がつまっている。後者は…説明しなくてもわかるだ

ろっ」

「まあ、そうだね」

「一応使い方はわかるだろう？『神なる知恵』で知識が頭に流れ込んでいるはずだ」

頭の中で本を開くようにイメージして、すこし別世界の知識を見ることができた。あと、神力の使い方も

見れた…あ、これ使えるかも？

「……へえ、神力っていろいろなことに使えるんだね」

「だろ？あと早速力のほうを確かめてみよう。向こう側にとてつもなく高い塔があるだろう？あれに向か

ってすこしでいいから何かを飛ばしてみてくれ。なのはの世界で言う、スフィア一発でいい」

「わかった…フォトンブラストッ！」

僕の放ったフォトンブラストはまっすぐ塔に向かってゆき……ええッ！うそ！？

「なんであれだけで崩れるのっ!？」

「…いや、あの塔はそれなりに丈夫で大丈夫だと思って打たせたんだが…まさか崩れ去るとは……んんっ

！まあいい。力の強さはわかったな？」

「うん、それと同時にきちんと練習しないといけないね」

「まあ俺はお前がそれを使って編なことをしないと信じているからな。がんばれよ」

「了解っ！」

「もう終わったわね？」

さつきから一人でお茶を飲んでくつろいでいたアリアがやっと終わったかって言う顔で声をかけてきた。

…殴っていいよね？

「ちょ、殴っちゃ私が消えちゃうでしょっ!？」

「いつも言っけど心を読むなよっ!」

「で、もういいの？」

「はあ…もういいよ？確認することは終わったし」

「じゃあ、例のことお願いね」

「俺からも頼む」

「任せてよっ！下界のことはお任せだよ？」

「…じゃもどすぞ？」

そうアポロンが言うと、僕の体が白い光に包まれて

「じゃ、いってきます」

最後に二人に向かって声をかけて

「「いってらっしゃいっ！」「」

二人も返してくれたあと、僕は海鳴へ帰っていった

112

というよりも、そのはずだった。

「何で宇宙空間なのっ!？」

この先のアイルに待ち受ける運命はいかに……

第7話 己の本当の姿（後書き）

ということで最新話投稿っ！！それに踏まえて新しい物語始動っ！！
前々から書きたい世界へと誘いましたよっ^^

これから書くのが楽しみで仕方ないですねっ♪

ということで、この回で今の「なのは」に関するお話はいったん中断しますっ！新たな世界については……フッフ、すでに分かるはずですよ？是非楽しみにしてください^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2603v/>

魔法少女リリカルなのは The World Of Desire

2011年10月18日05時56分発行